
聖銀学園～始まりの炎～

tick

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

聖銀学園～始まりの炎～

【NZコード】

N4937P

【作者名】

tick

【あらすじ】

この世界の人間は、産まれもつて特殊な能力を持つて産まれてくることがある。例えば…炎を出す…人の心を読む…身体強化などetc

そういう人達を『能力者』と呼び、能力を完璧にコントロールするために専門の学園に入らなければならない。これは、その学園の1つ『聖銀学園』に入学した、ある少年の物語…

プロローグ（前書き）

駄文ですがどうぞ読み下さい

処女作なんで自信はありませんが感想待っていますーー！

プロローグ

「ふあ～」

重いまぶたと必死に戦いながら自室から洗面所までよたよたと進んでいく。足取りが危うい…

ガンガン！？

「ツア！？痛い！－2箇所も打つた！－」

やはり、壁に頭を打ち凄まじい勢いで床に後頭部を打ち付けた。しかしそのおかげで目が覚めたようだ。

「歯ブラシ…歯ブラシ…つと」

顔を洗い歯を磨き、朝食を食べ、制服に着替える。いつもの事をいつもどおりにこなして行く。古い部屋の中を見渡すとある物に目が留まる。

「…………」

それは制服であつた、上は青色のブレザーで左胸のところに五角形の盾に杖と剣が互いの中心を十字に重なりあつた校章の様なものがいる。よくみれば校章の下に『SHIROGANEE』と書いてある、おそらくこれが名前であろう。ズボンは茶色と白のチェックで上下を合わせるととても清楚な感じがする制服だ。一通り確認したところで「ふう」と息をつき着替えに取りかかる。

着替えたところで時計を確認する。7時50分……充分間に合つた。
と判断し、満面の笑顔を浮かべている両親の[写真に向かい、手を合
わせ目を閉じる。

(母さん、父さん、今日はもう高校の入学式だよ。あれから色々困
難だったけど、頑張って来たんだ。高校も頑張って来るから見てい
てね。それじゃ行つて来ます!!)

小鳥のさえずりだけがこだまするなか、目を開け、時間を確認する。

8時10分、
8時10分、
8時10分、

「やべつ…………」

と大声を上げて、あわてて家を出ていった。

果たして入学式には間に合つたのか…

入学式へ（前書き）

すいません。駄文です文才がほしい！！

感想待つてます！

入学式へ

「やべー……なんでなんだよ……」

気持ちのよい朝の陽射しが降り注ぐなか少年こと『黒刀炎真』とくとく『うえんま』は走っていた。いや、全力ダッシュしていった。朝から学生が全力ダッシュをすることはもちろんその理由は、学校に遅刻する事を回避するためが主だろう。それに伴い炎真も遅刻を回避するために全力でダッシュしていた。

「くそー……入学式から遅刻なんてありえねえぞ！」

またそんな声を上げながら田の前の角をトップスピードで曲がつて行く。

「ツー？ 危ない！！！」

やつぱり人いたんだ…
朝の占い最下位だったしな…
去らば入学式…
そしてすいません前の人…！

「時間（time）遅延！－ツー？」

そんな声がした…

「時間（time）遅延！－ツ－？」

そんな声が聞こえた瞬間的、身体の中からなにかあふれでたような感じがした。

「うおー？あいつの間に…？」

ぶつかるはすだつた男はいつの間にか俺を横によけて立っていた。
「やあ、君平気なの？」

目があつて、不思議そうな表情で話し掛けてきた。

「あーあ…特に問題はないです。はい」

「ふーん。なら良かつた、君も遅刻しそうなんだろ？僕の能力はもつて…10分だから早く急いで学校に行つたほうがいいよ。じゃ、またね。」

「待つて…」

呼び止める暇もなく行つてしまつた。嵐のよつな人だつたな…

あの人への能力なんだつたんだ？

あ…10分つて言つてたな。早く行こうつと。

細かい事は気にせず学校に走つて行く炎真であつた。

あれから10分

なんとか学校についていた炎真。

「はあー着いた！！遅刻セーフ。」

教室は…と探し始める炎真。

1年、異能の…ん

あつた！！

2階の一一番おくだな。よし気合いで入れて行こう。
と、てけてけ、と歩き出した炎真だった。

道のりは以外と短く教室にあつという間ににしてしまった。ガラガ
ラとドアをあけ自分の席に座り、朝の事を考える…

(あの人の能力はいつたい?)

もちろんこのこと以外ない、黙々と静かに朝の事を分析していく…。
同じ制服だった事

・能力使用前の掛け声、「時間（time）遅延…！」

実際、判断材料が少なすぎてなにも出来ないのだが…

「はあ…」

自然と溜め息がでてきた。最悪だ…幸せがまた1つ逃げていった…
そんな事を思いながらさつきの2点について永遠に考えていた。

キーンコーンカーン~

朝の始まりの鐘がなつた。それとほぼ同時に先生と思われる、女の

先生が入ってくる。

「 「 「おおーーー..」」

クラスの男子たちが歓声をあげる。この歓声で思考を解いた。

「はーい、静かに。皆さんこの『聖銀学園』の異能クラスに」入学おめでとうございます！パチパチパチパチ、この異能クラスは皆さんの知つてのとおり、魔法とは違う能力を持った人、特にその中でも特に能力が強い人達が集まるクラスです。私も、もちろん能力はもっています、皆さん今から、入学式なので、並んで体育館に入つて下さい。」

話しが終わると、人それぞれにぞろぞろと席を立ち始める
何だか分からなかつたな…あの能力…
などと思いながら、席を立ち体育館に向かった。

てけてけと体育館へ

今、入場して恒例の長い長い理事長のお話。

「ふあ~」

この時間、炎真の10回目のあべびである。
やつぱり長いな…
すでに30分は経過している。

「であるからにして、えー新入生諸君には頑張つてもらいたい。
これで、話を終わる。」

やつと終わつた…はあー。11回目…

もうダメだ…俺のHPは〇だ！

しかし、そんな炎真に追い討ちをかけるよつて、「次は生徒会長から

の話しだす。」

まだ続くのかー！！！！！！

と心の中で叫ぶ炎真であった。

おまけ～

入学式は総時間3時間と15分続いたそうで、1時間を理事長、1時間

時間を生徒会長がしめていたとか…

自己紹介？

はあ
…

入学式という長い長い儀式を、終えて各クラス毎に教室に帰つて行く。心なしが新入生に限らず、かなりの生徒の顔がやつれている。この物語の主人公『黒刀炎真』もかなりの部類にもちろん入つていた。

「チキシヨー長いんだよ…」

本当は、叫びたかったがそんな勇気が炎真にあるわけがなく、小声で叫んだ。

声を出して落ち着いたのか、顔はやつれていなかつた。というよりは、気持ちの切り替えがつましいのだろう。

「炎真――!――」

「ふあい!――?」

教室内に、甲高い女の声が響き渡つた。いきなりの事に炎真は裏返つた声をあげる。

「なあ炎真一先生の話し聞いてたか?」

教卓から机の前まで歩いてくる。そのかおは、笑顔だが、目が笑つていなかつた。

「もちろん聞いていましたとも――!――」

とつをに嘘をつく、といふかなぜ聞いていなかつたかというと、ただぼーつとしていた時間が長すぎたのだ。だから、情景反射みたいなことつをに嘘がでてしまったのだ。

「ほほお一田は虚ろで、机に上半身を預けながら聞いていたんだな～」二口少

「いや～あの、はい……」

「やけに語尾が小さいなーよしー決めたー！」

と、顔全体で悪い笑顔を浮かべている。

「何を決めたんですか！？」

「フフフ…（不敵な笑み）

なにを決めたか解らない炎真は、先生の目を真剣に見つめる。

「…………」

教室に沈黙が訪れる、その間も、炎真と女教師の見つめあい？にらみ合いが続いていた。

「ブツ！アハハハハ…！」

その沈黙を壊したのは女教師だった炎真はポカーンと口を開けていた。

「別に、何にも決めてないから心配しなくていいよー！」

「…………ツーああー？って今なんて！？」

「ああーー」めんね、あなたをつい苛めたくて「そんなことこけないからーー」といのは[冗談で…]

つい、突つ込んだ炎真。

「あなたが、ぼーっとしてたから言ったの。前に何も話していないからあなたがもし、話を聞いていたとしても何も答えられないのは当然よ。」

「なんか俺、なんとなく起こられたといつの認識で…」

「それでいいとおもうわ。」

なんかショックを受け、負のオーラを纏いはじめる。まわりのクラスマイトはやや引いている…

「今から最初のホームルームを始めます。」

えつとーーと名簿で名前を確認しはじめた、

「新中井さん、命令をーー」

「了解ですーー」

きりーーつ、気をつけ、礼！お願いします。着席。

まあ、見事に存在を、無視されて最初のホームルームは始まつて行つた。ちょっと、炎真がきづついたのを追記しておく。

「それじゃー自己紹介から始めるから～

と、先生が自己紹介を始める。

「みんなの知つてのとつづ、この『異能』の担任の戒誠かいせいだ、かい先生とも呼んでくれ。もちろん、この異能を担任するから私も能力もちだ。」

「おおー、やつぱりなどと声があがる。

「静かにー」

氣だるそうな声でかい先生が言つ。

「私の能力は『金縛り』だ、言つこと聞かないやつは縛るから大人しくして置けー」

教室が一気に静かになる。

「はい、これから番号若いやつから血口紹介していくぞー」「一番、前にでろー」「はいなのですー」と元気に前にでる。

「ほんにちは！新中井瑞希あらなかいみずきなのです！能力は『超念力』名前どつづ物を浮かせたりすることができるのですーこれからよろしくですー。」

身長は150後半ぐらいで、とても活潑そうな女の子だった。

パチパチーはい次ターと先生。

「妾は尾上舞おのづえまいじゃ、能力は『完全獣化』じゃ。産まれた時に無意識に使って吸血鬼になつてしまつたが後悔はしたことない、よろしくなー！」

次の子も、150後半ぐらいで、髪は白色の長いストレート、目が赤いのが特長だった。

以下省略と、このような自己紹介が続いた。ちなみに炎真は…

「黒刀炎真です、能力は『火の操者』です。友達たくさん欲しいんで、気軽に話し掛けて下さい！」

と云つ普通の自己紹介をしていた。

自己紹介？（後書き）

色々やりたいと思っています！駄文を読んで頂きありがとうございます！！感想待ってます

生徒会長による大会（前）

「血口紹介終わったなーで「やほーいー！」始まつたな。」

血口紹介が終わつた所で、先生が話し始めたと思つたら、女の声がした。

「 跡せん、さつきぶりの生徒会長の如月彌生です。さて、なんでこんな半端な時間に校内放送しているかとこりと…」

…………シーン…

早く言えよー！

と突つ込みたくなる炎真…

「 今年もやりますー！名付けて！？一年生と仲良くなりつー・ハラハラドキドキー校内に現れる敵を倒して一攫千金大会ーー！」

「ネーミングセンスないつー？」

ついつい突つ込みを入れてしまつた炎真。

「えーなんか一年異能らへんから聞こえたよーな？」

すごい地獄耳だな…

「黒刀炎真ー大会後で、生徒会室ー！」

「なんでバレターー？」

本氣で悩む炎真。

「今から10分後が始めるから詳しく述べ担任に…ち・な・み・に…賞品は学食1万円分…！頑張つていこー。」

キーンコーンカーンコーン

最初は鳴らなかつたチャイムが放送の終わりをつげる。

炎真サイドー

すごいな会長…能力か？それにしても、はあー後で生徒会室か一めんどくさいな…

「今から恒例の親睦会を始める？」

最後の？…じゃないよな！

「今からこのブレスレットを配る、これは今日の終礼で集めるから無くならないよ！」

腕時計のようなブレスレットを配り始めた。

「これは、今日の大会で集めた得点がわかるようになされたブレスレットだー全員腕に着けたら席を立て。」

俺もブレスレットを腕に通した、あるとこひでピタリと止まり、力チッと音がした「うおつー？」と声があがる、腕から取れなくなつたからだった。

「先生、どんな事があるんですか？」

と炎真。

「えーとな、ひ「10分足ったんでスタート…優勝目指して突っ走れ！」頑張れよ。」

「ちょー？」

かい先生が何か言おうかしたときに開始つてタイミングわる過ぎだろ！しかも、開始と同時にテレポートみたいな感じで消えたし…最悪だ。まあ開始されたから、なにしたらいいかわからんけど頑張つてみるか！

／＼＼

ポンポン…

後ろから肩を叩かれた。

「炎真でええよな？」

「あつてるよ、えーと…大祐だよな？」

「あつてるでー！」

確かこいつは、如月大祐。きさらぎだいすけ何故か、関西弁でテンションがたかいやつ、てかこれが自己紹介の第一印象。

「なあー炎真。わいと手組まねーか？」

「俺はいいよ、でもなんでチーム組む必要があるんだ?」

「それはな…」

「ぐくり…

妙に間をとる大祐…いや…怖いんだけど…

「会長の如月彌生知つてるよな…」

「ああ、あの元気はつらつとした人だろ?入学式の挨拶も長かつたしな…」

「でな、あれわいの姉貴なんや…」

「へえ~姉貴なんだー。あ…あ…姉貴!…?」

まさか、こんな所に会長の兄弟がいるなんて…ん、でもよくみたら…田のいひ、同じ。輪郭、似てる。全体的に、似てる…すんごい似てる…

「確かに似てる…」

「でな、姉貴の事やら、この大会絶対に戦闘があるねん!」

あ、眩きを華麗にスルーされた…

「そいで、炎真の能力は『火の操者』やろ、わいの能力は『水の操者』やねん。」

「つまり、俺とお前の弱点を補つ話ししだろ?」

「そーゆことや! 今日の大会よろしくな! !」

גָּדוֹלָה -

ガシッ！と熱く握手を交わした。

— 1 —

一 なあ／大祐・

なあ、炎真……」

「なんでこんなに魔物がいるんだよ（おるんやねん）――！」

さかのほの事数亥

「なるほど、校内に現れる魔物をどんだけ倒すかという大会か。」
「なっこううわ、弔遺らー！」

「… なみでみるよ。魔物はやられた人は轉送陣で強制轉送してゐるらしい

わいも氣をつけよ……炎真……後ろせ！」

炎真のきがそれでいた時に後ろから、熊のような魔物が腕を振りかぶり今にも炎真を殺そうとしていた。

「ツー？間に合つかー？護炎壁ー！」

ガアアアア！と炎真に魔物の爪が届く直前に、炎真を中心に地面から丸い炎の壁が立ち昇る。魔物は、急な事に反応出来ずに一瞬にして

灰になつた。

「ありがとう大祐！助かつた。」

「油断大敵だぜ、よつと…」

大祐は、水の刀を片手に魔物をズバズバと伸してゆく。

そんな感じで昼が過ぎた頃、

「なあ～このままだつたら、点数低いよなー」

「そりやな～なんかドバアといきなり出できたら面白いんやけどな
ー」

さらりと恐ろしい事を言つ大祐。

「いや…流石にそれはー」

と遠慮気味の炎真。

こんな調子で廊下を走っていた。ポチ…このボタンを踏んだよう
な音が大祐の足元から聞こえた時天井がパカッと開き、廊下をうめ
つくす程の魔物が降ってきた。
ここが最初の状況になつた。

「な、なあ大祐君…願い事が通じましたよ…さあ喜んであの魔物の
下へ！」

「いや…炎真君…なんでわいの後ろに陣取つて今にも押しだそうと
いう構えをとつているんか教えてくれへんか?」

タラーと大祐の横顔に冷や汗が流れる。

「いやー大祐君の願いが叶つたし、なんかボタンを押したようなポチという音が大祐君の足元から聞こえたからー」

この状況を楽しんでいる炎真。

「いやー助けてくれるよなー！」

と必死の形相で訴える大祐。

「いやだ！逝つて来い！大祐！」「ドーン！…と背中を押した炎真。

「！」の…人でなしゃ…！」

と魔物の群れに突っ込んでいった。

「つおー！やつぱり強いな、大祐は！」

魔物群れに突っ込んだ？大祐を見ている炎真はそんな事を思つていた。そもそもそのはず、大祐は炎真に突飛ばされた瞬間、片手だつた水の刀をけし、身長よりも長い槍を出していた。

最初は敵が自分の範囲内に入つた瞬間に槍による突きで一体消滅させ、そのままの勢いで槍を右に薙ぎ、槍の重さと遠心力を使い魔物を壁に叩きつける。これで2体消滅。

どんだけ怪力なんだよ…

と思つてしまふ、炎真。

そんな事を繰返し、魔物の半分を消滅させていた。
ピュン！と炎真に向かつて水弾が飛んできた。

「なにすんだよ！？あぶねー」

「手伝え！炎真！！」

確かに、後半分もいないので大した苦労にはならないだろう、と思
い炎真も殲滅にかかるのであつた。

おまけにー

大会が終わった後、炎真は大祐にしごかれたそうだと…

生徒会長による大会（前）（後書き）

あけましておめでとうございます！今年も何とぞ温かい日で見守
つて下さいね

感想、アドバイスなんでもお待ちしています！

生徒会長による大会（中）（前書き）

お気に入り登録ありがとうございますーーまた引き継ぎの駄文を
よろしくお願ひいたしますーー感想待つてます！

生徒会長による大会（中）

「なあ、炎真ー」

「なんだ大祐？」

只今の時刻は、9時50分この大会が始まつて1時間がたつていた。2人はあのモンスター・ハウス（魔物達）をバッサバッサと（主に大祐が…）斬り倒し廊下を歩いていた。

「なあ炎真ー魔物でえへんよな。」

「確かにでないな、大祐があのモンスター・ハウスやつつけてから…」
そう確かに魔物がでないのだ。正確には出る頻度が下がつたと言うことだが。

「人が随分少なくなつたよな。」

「確かに、まあわいには関係あらへんけどなー」

「シシリシと悪い笑顔で笑う大祐。

「そろそろ1時間やなー」

「ん…もうそんな時間か。」

「ま、姉貴の事やからそろそろなにがあると思つでー。」

と自信満々に胸を張り言つ大祐。そこに、「はーいーー」と元気な声で生徒会長の声が聞こえてきた。

「さあ、始まって1時間経ちましたー早いですねーあ…因みにこの放送は中間発表です！」

「ドンドン！…パフパフ…」と放送から聞こえてくる。

（テンション高い…）と炎真。

「廊下を歩いている炎真君、後で生徒会室！」と会長…

「絶対能力だー！？」と叫ぶ炎真君の顔は打ちひしがれていた。

「はーい、発表します！…えー1位は2年異能の藤本伊織君、松本命君、前田聰欺君の男だけの3人チーム！…ポイントは350の断トツです！」

「「異常だ（やな）…」」

と空いた口が塞がらない2人。

「皆さん追い付けるように頑張つてね！…因みに、12時までなので…今から逆転ように新ルールを決めました！…喜べ！…まず…生徒間でのバトル。OK、倒した相手のポイントをゲットできます！…そして、もっと強い魔物投入します！…これかなり高得点だけど…死なないでね、それではグッドラック！…ドラッグはいけないよ！…てへ！」

ブツッ…

ヒュ…

「「やみー…」」

と全ての生徒から声が上がった。

――

「大祐おきる！…」

ベシッ！

「ハツ！？ すまん… フリーズしてもうた。」

さつきので固まってしまった。炎真のおかげで解凍し、ありや不意討ちや…などと思っていると、炎真が眞面目な声で話しかけてた。

「大祐、こんままでたら確実に1位取れない…」

と、間を置き、一回、大きく深呼吸入れた。

「1位の先輩方を狩りに行こうぜー！」

「…」

急に黙りだした。しかし、その沈黙は炎真が破つた。

「ブ、アハハハハハ…！」

「な、なんだよ大祐！？ いきなり笑いだしてー！」

「なに言い出すかと思ったら…」

「当たり前だ！」

「当たり前や…よし！ 行こうぜ先輩達の所へ…」

炎真の顔はとてもイキイキとしていた。

「うし……さすが相棒の大祐！ 今すぐ行くぞ！」

と言つやなんやり、ダッショウしました。

「グエツー？」

とたんに、蛙が潰れたような音が響いた。大祐が急に駆け出した炎真の後ろ襟をガツチリとつかんだからだ。

「な、何すんだよ！」

「ゴホッ」「ゴホッ、と咳がでている。良く見ると涙田だ…」

「いや、すまへん。」

「なら、なんで引き留めたん？」

「いや、てか馬鹿やな！相手は3人やで、まず人数揃えるのが先やろー！」

「フー？ 確かにそうかも…」

肝心な所で気が抜けている、炎真。その逆の大祐が、互いの短所を補っている？

「まあ、まだ時間あるんや。強くなつた魔物でも倒しながら、仲間探そいやー！」

「おひー！」

とまた廊下を歩きだした炎真達であった。

「ツー? 強いのですよー。」

1年異能の新中居瑞希は苦戦していた、決して新中居自身が弱いといつ訳ではない。新中居はどちらかというと強い部類に入る実力者だ。

新中居の異能は『超念力』だ。この能力は『念力』の進化したようなものと思つてもらつてい。普通の念力よりも、重いものを宙に浮かせたり。普通の念力よりも遠くの人に意思を伝えられたりと、まあ、そこまでは変わらないが、超念力だけが行える技が一つある。それは、『瞬間移動』だ。テレポートとも言つ。これは、A間とB間を一瞬にして移動するという名前道理の技だ。

なんと地味な…と思う人もいると思うが、1対1になるとなると備動作もなしに死角に入られるのだ。これ程厄介な能力はない。戦いに置いて、大きなアドバンテージとなる。

話しが逸れてしまつたが…

そんな強力な能力をもつた新中居が苦戦している程の魔物が現れたのだ。

(やばいのですよーーー！)

そう思いながらも相手を倒すべくまた死角へと一瞬で移動し、念力で固めた拳を叩きつける。

ドゴーンー?'

(渾身の一撃なのですよーこれで…)

辺り一面に、砂ぼこりが舞う。だんだんと砂ぼこりが重力に従い落

ちていく。

(…ー?嘘なのですよー?)

そこには、無傷の「ゴーレム」が悠然と立っていた。

(「ここまでやつても無傷なのですかー?最終手段ですー?」)

意を決して息を大きく吸う…
カツと目を開き、

「助けてなのでーすー!」

と叫んだ…

? 「助けてなのでーすー!」

と大きな音のした方から聞こえてきた。

「大祐ー!行くぞー!」

「仲間を得るチャンスやしなー!」

その声を聞いて炎真と大祐は駆け出した。声はそんなに遠くから聞こえていなかつたので数分走ると、声を上げたと思われる少女と対人している「ゴーレム」を見つけた。「「あー!号令係!」」

「違うのですー?つて…黒刀さんと如月さんですかー?助けてなのですー!」

「助けるけど…条件があるー」一矢弓…

「あーー条件あるんだ…」――ヤ――ヤ…

「なんなのですかー?その笑顔ー?」

「「どうすんの~(や~)~?」――ヤ――ヤ…

「その条件はなんのですかー!」

「ソソソ…

(なあ炎真あれでいいよな…)

(もちろんあれだろ…)

な…なにが来るのでですか…

Goku――と睡を飲む新中居…

「「仲間になれ!」」

「…」

「ソソソ…

(な、なにか不味い!)と言つたか大祐!~

(別にないけどな…)

急に黙り込んだ新中居を見ると静かに笑つてゐると思つたら大きく笑いだした。

「あはははーなーんだ、そんな事ですかー!ちょっと怖がつていた自分がバカなのですよ!分かつたです、仲間になるです、だからさつわどいの『一レームを倒しましょ~!』

「「フフ~よりしきな瑞希~」

「わいもよりしへー」

と2人で手を前にだし握手を求める。

「ハハハハよろしくなのですー！」

3人は手をとり、新中居瑞希が新しくチームに入った。

「さつきから気になつたんだけど、あの赤色の玉なんなんだ？」

と炎真が廊下の端にあるものを指差した。

「コアやなー」

「だよなー」

「はあー獄炎柱」

炎真がコアに技を放つ、すると今まで無敵を誇つたゴーレムが唸り声をあげながら崩れさつた。

「瑞希バカだな…」

「本当にバカやな…」

と2人揃つて。

「つむかーですー失敗もあるのですよーーー！」

とポカポカ炎真達を叩く瑞希の姿があつた。

生徒会長による大会（中）（後書き）

感想待つてます

生徒会長による大会（完）（前書き）

（完）ですが…

終わらない…！

生徒会長による大会（祝）

「はーい！ 12時になりました！！ 時間でーす。」

12時になつた瞬間に校内放送がはいつた。

「最終結果報告をします！ フフフ… 意外な結果です、なんと！ 校内に残つているのは6人！ しかも全てチーム！」

ウヒヤー！ …などと奇声をあげている生徒会長…

「うーん… 決闘をします！ いきなりだけど頑張つてね！ それでは…」

『強制転移！！』

シコン…

会場が光つたと思ったたら、そこには制服姿の6人が立つていた。

炎魔サイド…。

「闘技… 場… やな？」

「闘技… 場… やな？」

田の前が光つたと思ったたらわざと違つ場所に立つていた。

「「闘技場?」「

「ほれ、田の前にでかでかで書かれとるで。」

「あ!?」

「確かに…」

確かに田の前の壁に『闘技場』と象徴するように書かれいた。

「で、何があるのかわかるか?」

「闘技場なのですから…決闘とか?」

「確かに姉貴の事やから、あり得るなー」

トントン…

不意に肩を叩かれた。

「ん…」

「うん、やつぱりだ。」

後ろを見ると身長一七〇後半位の男が立っていた。

ん?見たことがあるような…

「朝以来だね、名前言つてなかつたよね?」

そうだ、朝ぶつかりそうになつた時の人だった。
といつ」とは… ます…

「あの時はすいませんでした！」

「いや、いいんだよ。結局ぶつからなかつたし、君も遅刻せずにすんだ。お互いにもなかつたんだからいいじゃないか」

卷之二、

なんといい人なんだろう！

「有難うござります！！」

「でだ、僕は松本命だよ。能力は『流れ人』よろしく。」

「『流れ人』！？あの特化能力のですか！？」

「ああ、そうだよ。」

「凄いですね…俺は黒刀炎魔、能力は『火の操者』よろしく。」

お互に自己紹介がすんだとにあの声が聞こえてきた。

「終わつたかな？それでは、今から新入生と以下略大会！決勝戦を始めます！！」

ウオ――！！

二〇一九年

周りを見渡すとさつきまで居なかつたはずの観覧席に大勢の生徒や教師がいた。

「はい、もちろん私が強制させましたー！」

やつぱりお前か…

「ということで、ルール説明します。今からはこの新入生歓迎大会の決勝戦を行います！試合時間は1時間、自分の異能を存分に使って闘つて下さい。負けの判定は、気絶又、自主的に負けを認めるか。注意としてはとくにありません。あ！？忘れてた…チームせんなので仲間割れはよしてね」

あれ？案外以外にやつてゐる…

なまくら記

やるときはやる人やからな……

「最後にチーム別に自己紹介するね。」

ウ
オ
—
！
！
！
！

なんで歓声なんだ？

「3年生の先輩達を押していく、部活動頭目となつた、2年異能の松本命！」

紅介が緋ると同時に「よんじく」と笑顔を浮かべ良ってきた幹事のような礼をした。

セーンパーティー！！

三十一

「 」の人はそんなに人気なんだ。うんわかるような気がする。

「 またもや、3年生を押し退け図書館長の座を手に入れた「前田聰

欺」

シーン…

「 」

本から目を離さないもの静かな男が立っていた。

「ソ」「ソ」…

デス館長だ…

ヤベエぞ…

いきなり右手を挙げ「23P…」^{ページ}

ドオオーン！

観客席から爆発が起きた。

「 」 「なんや（なにが起きたのですか）！？」

「 多分… あの人ガ…」

爆発を起こした張本人を見てみると、視線を本に戻していた。

なんて無表情…

「 はい、爆発ありました… 最後は2年風紀委員長、その名も… チ
ビ…！」

「チビいうな！！射殺すぞ！！」

「ごめんごめん、2年藤本伊織。以下省略。」

「チツ…彌生のやつ…」

3人の内最後に紹介された人は、確かに小さかつた： 大体、150後半ぐらいかな。うん、確かに小さい。大切なことなんで2回言いました。

「この3人に対するは、1年だけのチーム！！」

ウオオ――！！

この解説で会場がわいた。

「1年異能のアイドル新中居瑞希ちゃん。不肖我が弟、如月大祐。最後に良く突っ込む、黒刀炎魔。」

「アイドルですか？」

「姊貴」

「自己紹介ではないからそれ！？」
しまつた

「はい、両チームとも真ん中によつて。それでは開始……。」

「ウオ――！」

会場のテンションが頂点に達した。

「大祐、瑞希！」

「「おうーはいなのです！」」

大祐と瑞希も準備は整つて要るようだ。

「打倒2年！行くぞ！」

「行くでえ！」

「潰します！」

あれえ？瑞希ちゃん…

と…その時だつた。聰欺と呼ばれた男が天高く左手を挙げた。

「ツー？」

なにをするきだ！

大祐達をみると同じように構えをとつていた。

「…………抜ける。」

「「「「「はあー？」」」」

見事に5人の声が重なつた。

「聰欺なぜに？今からが楽しいんやぞーー？」

伊織先輩が問い合わせる

「…………めんぢくさい… 伊織… 戦闘狂…」

「なんだと！けつ！？まあいや、帰れ帰れ！3人より2人の方が
楽しめるしな！」

シーン…

「あつ…えー聰欺のいけず！違つ違う…聰欺選手辞退で残り2人！
！」

あ…いいんだ…

「おつと、ハプニングがあつたがこれからが本番だ！きい抜くなよ
！…」

「ツ…？」

ドオオン…？

音のした方を見ると大祐が壁に叩きつけられていた。

「大祐！？」

「大丈夫や…」

ガラガラという音と共に身体を起こしている。

「炎魔さんは命さんの相手をお願いします！伊織さんの相手は私と

大祐さんでするので任せてくれ……。」

「頼んだぞ！」

俺は命さんの方を向いた。

サイドアウト……

大祐サイド……

身体痛いな……

くうー加減なくなぐりやがつて……といつか動きまつたく見えへんかつたで！手加減してられへんな……

「なあ、姉貴……！」

「なに愚弟？」

「愚弟つて……『具現化』使ってええんか？」

「つーん……伊織使っていい？」

「はつー…楽しくなるならなー！」

「だつて、愚弟。よし、これから『想いの具現』の使用を認めます！」

ほんまありがたいな。見せたくなかつたんやけど炎魔も使つてる仕方ないな……

「瑞希ちゃん、具現化できるか？」「

「出来るのですよー。」

「行くでー。」

『我想いをここに具現化せんーー。』

大祐と瑞希の身体が発光しあげる。やがてその光は收まりそこには、長い三叉の槍をもつた大祐と両腕に籠手をはめた瑞希が立っていた。

「具現『水神ノ三叉』ーー！」

「具現『双龍ノ顯』ーー！」

会場から声が上がる。

「神と龍かよー？」

「なんだあいつらー？」だから出したくなかったんやーてか、瑞希ちゃんもやるやないか！

「瑞希ちゃん頼もしいなー！」

「大祐さんもですよー。」

まさか、龍の名前が入った具現化なんてなー。

「龍と神の名前の具現化なんてなーやりがいが有るつてもんだーー。なんやあいつ…笑つてやがる…

「ま、どうせ俺には勝てないけどなーアツハハハハーー！」

「なんやとーー倒してやるーー。」

発すると同時に地面を蹴った、20メートル位あつたはずの距離は

あつという間になくなっていた。

「てやつ！－！」

そこからの槍での神速の突きを繰り出す。この初撃は常人いや闘いなれている人にも避けられるものではないと大祐は思っている。

「甘い角砂糖のように甘い！」

下にしゃがんで避け、カウンターのアッパーが放たれる。

ツ！？避けきれん！？

「大祐さんしゃがんで下さい！－！」

フツ…と一瞬で横に現れ、右手で殴りかかる。

「予想済み！－！」

読まれていたのか、振り返り様に裏拳で応戦。
伊織が放った裏拳は瑞希の顔に吸い込まれるように入って振り抜かれた。

振り抜いた！？当たった感触がないだと！？

「残像です！」

「チツ！－！」

声が聞こえた時には両手の籠手に光を蓄えた瑞希が伊織の背後に回っていた。

「行きます！！『霸轟』『双龍破天掌』！…」

目に入った瞬間に両手を十字に交差させた。

「それだけでは、防げないのですよ…！」

「だあああーー！」

ズゴォーン！！！

もの凄い音とともに伊織が地面に叩きつけられた。

「卑怯やけど我慢してやー！」

叩きつけられた伊織に大祐が放つ。その左手には三叉の槍『水神ノ三叉』が握られている。しかし、その槍は一瞬にして弾け飛び大祐の頭上に水の大塊として表れた。

「水神』激流ノ雨槍』！！」

大塊が長く大きな水の槍となり、大祐が手を振りかざすとともに、手の延長線上にいる伊織に亜音速で向かっていく。

当たる…これで終わりや！

瑞希大祐の勝利を会場の全員、そしてその自身も確信した。

バアアアアアン！！

水でできた槍が直撃し霧散する。

「気を緩めたらあかんで！」

「勿論なのです…」

結構力使つたで…終わってくれたらありがたいんやけどな…

霧散していた霧が風によつて晴れていく。

「マヂかよ…」

そこには笑いながら立つてゐる伊織が立つていた。

大祐アウト…

瑞希サイド…

「…ツ！？」

なんで…立つてゐるのですか！？ 私の攻撃も力を抜いて居ませんでした、大祐さんの顔を見るからに力を抜いたという感じないのに！？

「アツハハハハ！…！」

伊織先輩が笑つています。

「え！？なつ…！…」

急にまた姿がぶれたと思ったら目の前にいて、殴りかかって来ました！…なんとか守れましたが、次は辛いですね…

「止めるか！」

「辛いのですよ…」

それだけ言つと伊織先輩は私達から距離をとりました。

「お前達のこと讃めてたよ！だから、少しだけ本気になつてやるー！」

「大祐さん！」

「ばけもんやな…」

まだ少しもだしていなかつたのですかー？大祐さんのいうといば
けもんですね…

「我が想い此所に具現するー！」

具現化ですか…

「具現『三種ノ神具・一ノ剣・古来ノ大剣』ー！」

伊織の周りに禍々しい気が渦巻き、姿を隠した。次に現れたときには、自分の体以上もある大剣を地面に突き刺し持っていた。

なんなんですかー？あの大剣！？

大剣から出でている氣がとてつもなかつた。神々しいけど…禍々しい
そんな矛盾している感じだ。

「受け止めろよー！」

その瞬間背中に悪寒が走つた。

すると、さりに禍々しさが増し力が集まっていくのがわかる。

「大祐さん！ 障壁をはるのです！！」

「解つとるーー！」

「防げよ…軌跡『夜纏ノ満月』！！」

「魔力全装填！！魔力障壁全力展開！！」

伊織の大剣から漆黒の斬撃が放たれると、展開したのはほぼ同時だつた。

ガガガツ！！！

クッ！？2人でも押されるのですか！？

始めの内は互いに均衡していたのだが、十秒もたたないうちにその均衡は崩れさり障壁は押され始めていた。

「ハハハツ！！よくもつた方だよ、この技は障壁なんかを壊すためだからな。吃驚！」

え！？上からのですか！？

氣ずいた時には遅かつた。

「沈め。」

パリーン…

ガラスが割れるような音と共に、大祐と瑞希の意識も途切れた。

「寝たか？ふあ～俺も眠い……」

2人が倒れている近くに立ち大あくびをする伊織だけがそこには立っていた。

サイドアウト…

炎魔サイド…

やつぱり命さんとか…勝てるかな？

炎魔は松本命と対峙していた。

「命さん…本気でいきます！」

「来るといいよ。」

今はこの一言で十分だ。

脚に力を込める。

…………行こう…！

地面を蹴る、目に写る景色が一気に変わる。目と鼻の先に命さんがいる。

「炎剣！」

炎の双剣をだし、そのままのスピードで突きを繰り出す。もちろん非殺傷だ。

「うんうん、想像どおりのいいキレ。」

最小限の動きで避けられる。

「ひつや……」

予想範囲内！

左の炎剣で横に薙ぐ。

「単純だね、炎魔君は……っヒ……」
伸びた左手に手を添えられぬ。
ヤバイ！？

そう思つた時には炎魔の体は宙を舞つていた。

クソ！

炎魔華麗に着地。

命から目を離さない。

「『思いの具現』の使用を認めます……」

出すしかないな……

『「我が想いをここに具現せん！……』
「炎魔君も具現化できるんだね。」

一人関心して頷いている男、命。

炎魔を中心に白、黒の柱が立つ。「オオ……」という強風が吹き、柱が

無くなる。

「虚刀」—太刀『天使ト悪魔ノ乱舞』！—

「なんだって！？」

「ツーーー！」

命さんが声を出すと同時に会場からは声にならない声があがる。

生徒会長による大会（完）（後書き）

大変忙しいので更新遅れました…すいません…

これからがんばりタイト思います…！…

今度は説明会にします、次回をお楽しみに

人物紹介編④（前書き）

なんか中途半端な所で…

すいません！！

人物紹介編

黒刀炎真
こくとうえんま

16歳

聖銀学園『異能』の1年。

能力：『火の操者』

身長：172cm

顔：黒髪黒目で整っている

性格：おちゃらけているが、いざ

なる。具現化：虚刀一太刀『天使ト悪魔

といつときは頼りに
ノ乱舞』

如月大祐
きさらぎだいすけ

15歳

聖銀学園『異能』の1年

能力：『水の操者』

身長：168cm

顔：水色の紙に碧眼。

性格：何故か、関西弁。基本明る
しく、怖い。

位置：ヒロイン1

具現化：『水神ノ三叉』

以上の長い青色の

三叉の槍。

身長

あらなかいみすき
新中居瑞希

15歳

聖銀学園『異能』の1年

能力…『超念力』

身長…158cm

顔…黒髪のショート。人なつっこ

性格…普通の学生?語尾に「～な

追記…軽度の戦鬪狂。

一言…名前が新中井から新中居に
しないで下さい!

い顔。身長…155cm
のです」とつく。

変わっているがきに

変わっているがきに

如月彌生

16歳

聖銀学園『異能』の2年

能力…『強制転移』

身長…163cm

顔…大祐と同じ髪と目の色。まさ
か。

髪はロング。

性格…楽天家の姉貴肌。後は豪快位置?..生徒会長。

追記…超地獄耳。

に姉貴というかんじのか
か。

藤本伊織

16歳

能力…『?』

聖銀学園『異能』の2年

身長…162cm

顔…黒髪の短髪。いたずらっ子み

性格…基本、楽しそうなことなら

たいな顔。

なんでも参加する。

適当屋!

位置…風紀委員長。

具現化…『三種ノ神器』一ノ剣 -

古来ノ大剣』

身長以上の大剣。

追記…戦闘=楽しい=戦闘狂

まつもとみこと
松本命

16歳

聖銀学園『異能』の2年

能力…『?』

身長…175cm

顔…落ち着いた精悍な顔付き。

性格…面倒見がよく、人に好かれ

位置…部活道頭目

イケメソ。
るやつ。

まえだとしき
前田聰欺

16歳

聖銀学園『異能』の2年

身長…170cm

顔…眼鏡のネクラみみたいな感じ

能力…『?』

二つ名…デス館長

追記…いつも本を持ち歩いている
りや。具現化…『?』

極度のめんどくさが

おのうえまい
尾上舞

15歳

聖銀学園『異能』の1年

能力…『完全獣化』

顔…白髪の長いストレート。

目に、妾…などの言葉使いが特徴。

意志の強そうな赤い

追記…吸血鬼

戒誠
かいじまこと

歳は30前半

聖銀學園の教師。

能力：『金縛り』

顔…活気溢れる目と黒髪のストレ

性格…姉貴肌、人をからかうのが

一ト。
趣味。

人物紹介編（後書き）

自分用であります

世界観は後からまたしますので、よろしくお願いします！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4937p/>

聖銀学園～始まりの炎～

2011年10月6日19時51分発行